

## 六条御息所考

金 賢 貞

六条御息所という女性とは、光源氏の忍び所の恋人の一人である。六条御息所はある大臣の娘として生まれ、十六歳の時皇太子と結婚、姫君を生んだが、二十歳で夫と死別し、未亡人となる。彼女は極めて高貴な身分と財産、その上、優れた才能と高い教養など、すばらしい条件を全部備えている女性である。この点においては、『源氏物語』に出て来る数多い女主人公の誰にも決して劣らないほど、何一つの不足もない最高の女性と言っても過言ではない。しかし、その一方で、六条御息所ほど不幸でつらい人生を生きていた女性も、『源氏物語』の中では稀である。彼女の不幸は、源氏との愛ゆえである。最初は源氏の方が積極的に六条御息所に求愛したが、気位高い彼女はなかなかそれに応じない。しかし、熱心に求愛する源氏に負けてしまった後は、かえって源氏の方が冷たくなって、訪れも途絶えがちになる。

そのような源氏のつれない態度の原因は彼女の方にもある。彼

女は気位高く、相手が息苦しくなるほど深く思い詰める性格で、源氏が望むような優しく従順な女ではなかったのである。彼女の不幸は、自分の持っていたすばらしい条件と教養が招いたものだったのかも知れない。六条御息所は自分の性格のため源氏に愛されず、一生暗い影を背負って生きていかなければならなかった。悲運の女主人公として、『源氏物語』の中に描かれているのである。特に執念深い女として登場する六条御息所は、その執念深さのため物の怪になってしまい、その物の怪という性質は彼女の一番大きな特徴として知られている。その点においては、『源氏物語』に登場する数ある女主人公の中でも、極めて特異な存在と言える。本稿では、六条御息所が物の怪となった動機と彼女の物の怪が取りついた対象に重点をおいて考察し、六条御息所の物の怪が物語の中で持つ意義や役割などについて考えてみたいと思う。

### 二

六条御息所が『源氏物語』にはじめて登場するのは「夕顔」巻

であるが、彼女は登場の仕方も独特である。「夕顔」巻の冒頭は「六条わたりの御忍び歩きのところ」で始まっており、これが六条御息所を指しているのである。しかし、「夕顔」巻では六条御息所という女性が具体的に紹介されているわけではない。彼女が六条御息所という呼称を与えられて本格的に『源氏物語』に登場するのは、「葵」巻である。六条御息所は、「葵」巻で「まことや、かの六条御息所の・・・」という形で登場し、「夕顔」巻の「六条わたり」の女性と自然に結びつくように構想されているのである。

さらに、『源氏物語』の中には、六条御息所と源氏との最初の出会いについては書かれていない。六条御息所は「夕顔」巻における最初の登場から、源氏とうまくいかない状態である。そして、それは彼女が死ぬまで、いや、死んだ後までも永遠に解けないままに終わっている。

紫式部は、このような構想で六条御息所が物の怪になる必然性を与えている。最初から、彼女は物の怪になるために用意された登場人物だったのかも知れない。六条御息所の性格や彼女をめぐる状況、周りの人物などが必然的に、非常にうまく六条御息所を物の怪にさせているのである。

『源氏物語』の中で、六条御息所の物の怪はまず生霊となって葵の上を取り殺す。次に死霊となって紫の上を危篤に陥らせた後、女三の宮まで出家に追い込んでしまうという、実に恐ろしい怨霊である。つまり、六条御息所の物の怪は深い愛執を持つ怨霊で、

これが彼女の物の怪の特徴となっているのである。

では、まず六条御息所が生霊となって葵の上を取り殺す動機や、その必然性について考えてみることにする。

「葵」巻で、源氏と六条御息所の関係はうまく行かないまま、源氏の訪れが途絶えがちになって、だんだんと足が遠退いて行くのを彼女は悲しんでいたが、どうしようもない。また、六条御息所は源氏よりも年上だということをとて意識していて、世間の噂なども気にかかり、その悩みは増えつつあった。

さらにその頃、光源氏の正妻葵の上は懐妊していた。そのため、もとより途絶えがちな源氏ではあったが、源氏の心はますます六条御息所から離れて行くばかりである。このような折に、葵の上と六条御息所との間に一つの事件が起きる。

賀茂神社の祭りの時、その御蔭の日に源氏も供奉することとなる。その行列を一目見ようとする人達で一条大路は非常に混雑し、大騒ぎであった。葵の上は懐妊していて体の具合もあまり良くなかったが、周りの人々に勧められて見物に出かける。しかし、あいにくその時、自分に冷淡ではあるが、愛しい源氏の様子を見ようとして、葵の上の車と六条御息所の車がおつかうようになってしまった。

二人の身分を比べてみると、葵の上は左大臣家の姫で、大將になった源氏の正妻として、非常に高貴な身分である。一方、六条

御息所は前東宮妃である。源氏の身分が高いとはいえ、臣下に過ぎないので、その妻の葵の上も六条御息所には劣る身分である。従つて、葵の上の方から六条御息所に敬意を示すのが本来であらう。

しかし、葵の上の供人達は、葵の上が源氏の正妻であるし、大勢だったので、六条御息所の車を力づくで、葵の上のお供の衆の車の奥の方へ押し退けてしまふ。六条御息所はこつそり人目を忍んで源氏の姿だけを見ようと出かけて来ただけに、人に知られてしまったことや、身分も自分より劣る葵の上から恥辱を受けたことなどで、彼女の高いプライドはひどく傷ついてしまふのである。

そのまま何も見ず、帰つてしまふと思つても、道はもう車でいっぱいになつて、帰ることもできない。その時、「行列が来た。」という声が聞こえて、その源氏のまぶしい様子を見る。しかし、源氏は忍び姿で葵の上の「人だまひ」の奥の方に押し退けられている六条御息所の存在などは知るはずもなかったで、そのまま通り過ぎてしまふ。

一方、正妻の葵の上は左大臣家の姫だけあつて、車もお供も一目で分かるように目立っている。源氏も彼女の前を通る時には、葵の上を意識しながらまじめな顔で過ぎて行く。源氏に全く無視されてしまった自分とは対照的に、丁寧な扱いを受ける葵の上を目の前で見えていた六条御息所は、自分の姿をこの上もなくみじめ

に思う。

これが、六条御息所の生霊化の一番決定的な動機となる「車争い」である。このように「車争い」で葵の上から受けた恥辱と、人前で源氏から無視されてしまったことなどが主な原因となつて、六条御息所は「ものを思ひ乱るること年ごろよりも多く」なりまさり、その結果自分も意識しないうちに物の怪となつてしまふ。結局葵の上は六条御息所の物の怪に取りつかれて大変苦しむことになり、男の子を無事に出産した後再び物の怪に襲われ、あつてなく亡くなつてしまふのである。

彼女が人を取り殺す物の怪にまでなつたのは、彼女の執念深い性格や高貴で教養高い貴族の女性として抑制しなければならなかつた恨みと嫉妬の念にも、確かにその原因はある。しかし、もつと根源的に見てみると、そこには真の一人の純粋な女として、つれない源氏への限らない愛が満ちていることを看過してはいけない。執念が深ければ深いほど、それは彼女の源氏への愛も深かつたことを示す証であるかも知れない。その愛は、純粋に愛を求める一人の女としての心よりも、ずっと強い力を持っている高貴な身分と教養の中で抑制されつつ、とうとう歪んだ形で現われてしまつたのである。

葵の上の死去後、六条御息所は源氏との和歌の贈答で、自分が生霊となつて葵の上を取り殺したことを源氏が知っているのに気づく。さらに、世間では葵の上の後に六条御息所が正妻の座につ

くだらうと噂されていたが、源氏の来訪も全くない。六条御息所はとうとう源氏への未練をきっぱり捨てて、齋宮となった娘とともに伊勢に下向してしまう。その後、六条御息所は重病にかかって出家し、一生源氏の正妻になれなかったばかりか、一度も妻らしい待遇を受けたこともないまま、忍び所の女として一生を終える。

### 三

六条御息所の死とともに、彼女の物の怪は物語の世界から消え去ったように見えたが、彼女の愛執は死んだ後も成仏できないほど深かったようである。彼女は出家して死んだが、死霊となってまた物語の世界に復活する。そして、今度は源氏の最愛の妻紫の上に取り憑き、さらに後には女三の宮の出家にも大きな影響を及ぼすのである。

光源氏四十七歳の正月に、六条院で女三の宮・紫の上・明石の女御や明石の君による女宴が催された。その直後紫の上が急に発病して、危篤に陥る。源氏の必死な看病と加持祈祷のため、いよいよ紫の上に取りついていた物の怪がその正体を現わす。よりましに移り、やっと調伏された物の怪は、源氏と二人だけの対話を望む。物の怪の言葉で、源氏はこの物の怪の正体が六条御息所の死霊であることを知る。物の怪は源氏の紫の上への献身的な看護と厚い情愛に負けたと言う。自分が成仏できず、このように物の

怪になって紫の上に取り憑いたのも、生前の源氏への強い執着のためであると言う。

紫の上に取りついた六条御息所の死霊は生前の生霊より下品で気味悪い感じである。さらに、物の怪は自分が死霊になって現われた理由について、源氏が中宮の後見をしてくれたことは大変ありがたく嬉しいが、源氏への愛執は死んだ後も消えなかったと述べる。そして、紫の上との話の中で源氏が自分の悪口を言ったのが恨めしくて、こうして紫の上に取り憑いたと語ったのである。

これが、六条御息所が死霊となって現われた決定的な原因である。この源氏が紫の上に語った女性評について、もう少し詳しく述べてみたい。この時、紫の上は三十七歳という女の厄年にあたっていた。源氏と女三の宮との結婚が予想できた頃から、紫の上は自分の厄年を言い訳にして出家を願っていたが、源氏はけっしてそれを許してくれない。そして、紫の上の無類の人柄を推称しながら、過往の女性達について論評するのである。その中で、

中宮の御母御息所なん、さまことに心深くなまめかしき例にはまづ思ひ出でるれど、人見えにくく、苦しかりしさまになんありし。恨むべきふしぞ、げにことわりとおほゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の随びをかさはさむには、いとつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなど、あまりつくろ

ひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。（『若菜下』二〇〇頁）と、六条御息所について悪口を言ったことがある。紫の上が急に発病したのもその夜のことであった。この源氏の紫の上との対話が原因となり、六条御息所は再び『源氏物語』の中に登場するのである。

紫の上が急に発病した後、源氏は紫の上の側からほとんど離れることなく、一生懸命に看病していた。その時、女三の宮は自分の意志ではなかったが、柏木との密通事件を起こし、その結果懷妊してしまうのである。もちろん、秘密にしていたが、後で源氏の知るところとなる。密通のことを源氏に気づかれた女三の宮は良心の呵責に苦しみ、出産後に出家を願う。源氏は表向きはその願い出を無視し続けていたが、内心でははっとしていた。結局女三の宮は出家することになるが、ここで再び六条御息所の物の怪が登場するのである。

後夜の御加持に、御物の怪出で来て、「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが、いと妬かりしかば、このわたりにざりげなくてなん日ごろさぶらひつる。今は帰りなん」とてうち笑ふ。（『柏木』三〇〇頁）

これは女三の宮の出家後、六条御息所の物の怪が現われる場面である。このように、女三の宮の出家にも六条御息所の執念深い物の怪が関わっていたのである。ここでも、六条御息所の物の怪が女三の宮本人に恨みがあつて取り憑いたのではなく、紫の上に

親密な源氏を恨み妬んだため現われたということが分かる。そして「今は帰りなん」という言葉は、六条御息所の物の怪が永久に物語の世界から立ち去ることを示している。

#### 四

六条御息所の物の怪が取り憑いたのは、葵の上・紫の上・女三の宮の三人である。葵の上に憑いた場合と、紫の上・女三の宮に取り憑いた場合とは、同じ六条御息所の物の怪ではあるが、その性格や特徴などが少々違う。そこで、葵の上の場合と比較し、その相違点と共通点などについて述べてみたい。

まず、六条御息所の物の怪に憑かれた三人の共通点と言えば、みな源氏の正妻であるか、それに準ずる最愛の妻ということである。葵の上や女三の宮の場合、さほど源氏から愛されていたとは言えないが、れっきとした正妻であり、それだけの待遇を受けている。紫の上は正妻ではないけれど、源氏が最も信頼し、愛した妻である。

さらにもう一つの共通点は、この三人に取り憑いた六条御息所の物の怪を見たのが、源氏一人であるということである。葵の上の場合、葵の上に憑いた物の怪が「すこしゆるべたまへや。大将に聞ゆべき事あり」と言ったので、他の人はみんな退いて源氏と物の怪だけが残る。危篤の紫の上が意識を回復した時に現われた物の怪も、「人は皆去りね。院一所の御耳に聞えむ」と、まず人

払いをしている。紫の上に現われて一年後、女三の宮の出家後に現われた物の怪が、六条御息所の霊と分かったのも源氏だけである。「かうぞあるよ。いとかしこう取り返しつと、一人をば思したりしが」という物の怪の言葉の意味は、源氏にだけ分かるものであったのである。

次に、相違点について考えてみたい。

まず物の怪の種類が違ふことがあげられる。葵の上の場合は、六条御息所が生きていた折のことで、彼女は生霊として現われたのである。しかし、紫の上や女三の宮に取り憑いたのは、六条御息所がすでに亡くなった後のことで、この場合は死霊である。死んだ後の六条御息所はすでに悪霊化していて、死霊として現われた時は生前よりかなり下品になっており、源氏も「いとうとましく」思うのである。

また、恨みの対象がはっきり違う。葵の上の場合、決定的な原因となったのは「車争い」で葵の上から受けた恥辱である。斎院御寮の物見の折、車の立所をめぐって葵の上の従者が六条御息所一行と争い、六条御息所側をおとしめたことにある。その折、源氏は六条御息所の存在に気づかず、葵の上の方だけを意識してまじめな顔で通り過ぎる。このようなことが六条御息所の高い自尊心をひどく傷つけてしまい、彼女を生霊化させる原因となる。この場合、生霊となって現われた時の六条御息所の憎しみは、葵の上その人に向けられているのである。

それに対し、紫の上や女三の宮の場合は、その恨みが二人の女性本人に直接向けられているのではない。六条御息所が死霊となって現われた原因が、紫の上や女三の宮に対する憎しみではないということとは看過されやすいが、重要なところである。

先述したように、六条御息所の死霊は、源氏の紫の上との対話の中に自分を不快に思ったと口にしたことが恨みになって現われたと語っていた。源氏への愛執があまり深かったため成仏もできなかった彼女は、源氏がほかの女性に自分の悪口を言うのを許せなかったのである。

本来なら、六条御息所の死霊は源氏に憑くのが当然であろう。しかし、源氏には仏神の加護が強くて近づきにくかったため、代わりに紫の上に憑いたのである。六条御息所の物の怪も自分の口で、「この人を、深く憎しと思ひきこゆることはなけれど」と、紫の上に対しては深い恨みはないと言っている。そして他の女性に自分の悪口を言った源氏への恨みは、紫の上だけではなく、女三の宮にまで及んでいる。

つまり、源氏への恨みや憎しみが源氏本人には直接いかず、代わりに紫の上や女三の宮に祟ったことになっている。このように、物の怪となって現われる動機や恨みの対象が、葵の上の場合とははっきり異なっている。

では、この六条御息所の物の怪が『源氏物語』の中で持つ意義について考えてみたい。私は六条御息所の物の怪が祟ったのが、



すべて源氏の正妻か最愛の妻であったことに注目したいと思う。源氏には神仏の加護が強くて、取り憑くことができなかったと言っているが、おそらくこれは当時の女性達の心理を代弁するものであろう。

当時は一夫多妻制で、男の人が何人かの妻を持つのは当たり前の時代である。そのため、妻の女性達が目の敵とするのは、その夫がほかに通う女の方である。『蜻蛉日記』の道綱の母の記録などを見ても、彼女の憎悪の対象になるのは夫の兼家ではなく、『町の小路の女』などのようにいつも兼家が自分以外に愛した女達だったのである。

もちろん、自分だけに愛を注いでくれない夫に対しても、その恨みは大きいはずである。しかし、それは夫のせいではなく、ほかの女の人が存在するためと考えてしまうのが普通であつたと思われる。夫は愛の対象である。六条御息所のように、その愛は嫉妬という形で憎悪に変わったりもするが、やはり妻本人にとって、夫はなくてはならない、かけがえのない存在だったのである。

つまり、当時の女性達が恨みをほらしたり、祟りをなしたりしたいと思う対象は夫の方ではなく、その夫にもっとも愛されている人、その夫にとってもっとも大切な女性であつたはずである。

六条御息所の物の怪の祟りは、当時の女性達の意識の中に潜んでいるこのような考えを代弁しているものではないだろうか。

さらに、紫式部は六条御息所の物の怪に、当時の女性達の嫉妬

や憎悪を代わりにはらす役割を与えていると思う。『源氏物語』の中で源氏の恋人として登場する女性は数多い。その中にはちゃんと名前が与えられている人もいるが、名前さえ書かれていない忍び所の女性も多かったはずである。女主人公として登場した女性の中でも、源氏から愛されなかった人は多い。源氏からもっとも愛されていた紫の上さえ、はたしてその一生が幸せであつたかは疑問である。

一夫多妻制の時代に生きた女性達は、夫に愛されている場合もそうでない場合も、それぞれ悲しみと恨みを持ちつづけて生きていたはずである。『源氏物語』の女の登場人物を見ても分かることであるが、このような悲しい人生は女として生まれた以上、仕方のないこととして受けとめられている。彼女達の心の中を強く支配する様々な情念は、どこにもはらすことができず、心の底に抑圧されたまま一生残っていたと思われる。

紫式部は物語を通じて、現実ではとうてい不可能だったはずの彼女達の歪んだ願望を実現させているのではないだろうか。六条御息所の物の怪は、このような紫式部の意図により、生霊になったり死んだ後まで死霊という形で再登場しているのである。そして、源氏のもっとも大切な三人の妻達に取り憑いて、次々と祟りをなしている。これは、夕顔を取り殺した「いとをかしげなる女」の物の怪や、夫に薫物の火取の灰を浴びせかける鰐黒大将の北の方なども、同じような役割をしているものと考えられる。

さらに、夫の側からも考えてみたい。源氏は、もちろん自身身に直接被害が来たわけではないけれど、このようにして自分の愛する妻や恋人達を失うことによって、間接的に大きな悲しみを味わっている。特に、紫の上が重病にかかった時の彼の絶望感とは並々ものではない。生きる意欲さえ失うほど、悲しみ嘆いていたのである。六条御息所の物の怪が取り憑いたのは源氏の妻達であるが、結局はそれが源氏本人に直接取り憑いた以上に、源氏を苦しめる結果を招いているのである。

このように、当時の女性達の潜在意識の中に渦巻いている嫉妬や愛欲、それに起因する暗い願望や残酷な心理を、紫式部は六条御息所の物の怪を通じて表現し、その抑圧された恨みや悲しみを代わりにはらしてやっているのであろう。六条御息所は、物語の中で悪役を与えられ、当時の倫理と道徳観が演じる偽善をみごとに破っている。そのために、紫式部は物の怪という少々非現実的な存在を借りて、人間の持つ暗黒面を象徴させているのであろう。

#### 〈テキスト〉

『源氏物語』(日本古典文学全集) 小学館 一九九二年

#### 〈参考文献〉

- 『源氏物語評釈』 玉上琢弥 角川書店 昭和四九年二月二〇日  
『源氏物語再検討』 手塚昇 風間書房 昭和四一年一月  
『源氏物語の本文と享受』 岩下光雄 和泉書院 昭和六一年一〇月

- 『源氏物語女性考』 関みさを 八木書店 昭和四五年七月  
『源氏物語私見』 円地文子 新潮社 昭和四九年二月  
『源氏物語必携』(別冊国文学No.1) 秋山虔・編 学燈社 昭和五三年十二月  
『源氏物語作中人物論集』 森一郎 勉誠社 平成五年一月  
『源氏物語の〈物の怪〉』 藤本勝義 笠間書院 一九九四年六月  
『源氏物語の人びと・作中人物論の現在』(「国文学」) 学燈社 平成三年五月

(キム ヒョンジョン 韓国伝統文化学校助教授)

#### 研究室受贈圖書雑誌目録Ⅲ

- 共同研究報告書(国文学研究資料館) 平成十二年度  
京都語文(佛敎大学国語国文学会) 七、八  
近畿大学日本語・日本文学(近畿大学文学部文学科日本文学専攻) 三  
金城国文(金城学院大学国文学会) 七七  
金蘭国文(金蘭短期大学国文学研究會) 五  
研究年報(大阪女子大学上文化研究センター) 二  
言語科学論集(東北大学大学院文学研究科言語科学専攻) 五  
言語学論叢(筑波大学一般・応用言語研究會) 十九  
言語表現研究(兵庫教育大学言語表現学会) 十七  
言語文化(一橋大学語学研究會) 三七  
言語文化研究所年報(武庫川女子大学 言語文化研究所)